
ミケとゆかいな仲間たち

リリィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミケとゆかいな仲間たち

【Nコード】

N4383A

【作者名】

リリイ

【あらすじ】

吉岡家の飼い猫ミケ。そのミケの日常生活を描いたお話です。

第一話：晴れだ！（前書き）

ミケの日々を描いたお話です。

短編で書いた『ねこ！ネコ！猫！』の連載バージョンです。
ヘタクソですが、最後まで読んでいただけたら光栄です。

第一話：晴れだ！

オッス！オレの名前はミケ！吉岡家で飼われてる猫だ。
今日は天気良くて、オレの野生の心を揺さぶる。

『ああー…外いきてえ』

と、オレはひとりごとを言ってみた。
なんで？行けばいいじゃん外に！って思ったやつ…後で職員室来い。
オレの飼われてる吉岡家はペット用のドアが無く、家を出るには我が主人にドアを開けてもらうしかない。

しかも今日は日曜日にもかかわらず、吉岡家の住人は一人もいないに等しい…

お母さんこと吉岡恵（37歳）は、仕事。

お父さんこと吉岡勇作（38歳）は、仕事が休みらしく、買い物へ。

お姉ちゃんこと吉岡千夏（16歳）は、部活へ。

お兄ちゃんこと吉岡勝（17歳）は、部活の練習試合へ。

のこる妹こと吉岡麻美（15歳）は、爆睡中……

駄目だ…使い物にならねえ…麻美ちゃんを起こすしか道は無いのか…だが、麻美ちゃんのねぞうはすこぶる悪く、前に起こしに行ったときには、寝返りをうった拍子に麻美ちゃんの拳がオレの横腹にクリーンヒット！そして、苦しんでいるオレに追い撃ちをかけるかのように、両腕が襲いかかってきて、オレを締め付けた……………駄目だ、恐すぎる…オレはまだ死にたくない！

そうだ！窓だ！窓がある！あれなら俺でも開けられるはずだ！ひやつほう！

タタタタタ…

居間にある窓まで行くと、窓ガラスで屈折した眩しい光がさしこんでくる。

『おお、おお、素晴らしい天気だ！まさに、オレが遊ぶにふさわしい天気』

さあ！早速外出をば！

ガッ！ガッ！

『……………？』

ガッ！ガッ！

『……………』

あ、開かない…何故…オレの動きは完璧なはずだ！

窓に前足をかけて、後足でふんばりながら、窓を横にスライドさせる…何故スライドしない…まさか！

オレは恐る恐る上を見上げた…

『何！？鍵が…鍵がかかってやがるのか！！…しやらくせえ！！』

オレはまた窓を横にスライドさせようとした…

動かない…オレの出せる力を出しきっても開かないなんて…

「にゃ…」

オレは鳴いた…いや、泣いた…

「にゃ…にゃ…」

何度も泣いた…そして…

『こうなったら、麻美ちゃんを起こすしかねえ!』

タタタタ!

オレは覚悟を決め、居間を抜け、台所を抜け、廊下に出て、全力で階段を上った。

『くっ…つくづくなんて家だ…扉が全て洋風とはな…日本人も、洋風にそまっちまったか…』

オレは麻美ちゃんの部屋の前で言った。

『洋風は開くときは合言葉のはずだ!』

オレは合言葉を探した…

『開け!ゴマ!』

駄目か…

『ドア!オープン!』

駄目か…

『オープン!ゲート!』

これも駄目か…よし、こうなったら!

『アバカム!』

【MPが足りない。】

何だとおおおお!

何か、何か無いのか…?

オレの…猫の脳みそはこんなもんなのか…?

『麻美の貧乳ー!バーカバーカ!悔しかったら出てこ…』

ガチャ…

「…何?うるさいよミケ…」

ヤバイ…殺られる…謝るしかない…

「にゃー」

「何?どうしたの?お腹が空いたの?」

つ、通じてねえ…オレは外にいきでえんだよー!

「にゃー!にゃー!」

「わかったわかった。下りるから、落ち着いて」

これが落ち着いていられるものか!オレは外に!外にいきでえんだ!
天気なんだよ!今日は天気なんだよ!?

「にゃー!」

「はいはい猫缶ですよ。マグロですよ。美味しいですよ？」

くっ…麻美ちゃん寝惚けてんのか？

オレは外に行きたいの！外行こう！外！

「あれ？いないの？」

「にゃー！（いただきます！）」

オレはまんまと麻美ちゃんに猫缶を食わされた…

「食べたね。んじゃ、私は寝るから！」

なにい！！？まだ寝るつもりか！？今は12時半だぞ？！

『ま、待て！早まるな！オレを外に導いて！』

「何よ？足にへばりつかないですよ…もう、しかたないなあ外で散歩でしようか？」

やったぜ！ついに外に！

念願の外に！

「あ、雨降ってきた！しょうがない。家で遊ぼうか？」

「にー……」

結局、オレはその日は外に出られなかった…

第一話：晴れだ！（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。
これから頑張りますので、もしよろしければ、感想などをお待ち
しております。

第二話：麻美ちゃんと散歩

結局昨日は何処にも行くことができなかった…

今日は、昨日の雨のせいで水溜まりなんかが出来てたりするけど、晴れだ！

今日こそは外に！

オレが居間の座布団の上で意気込んでいると、麻美ちゃんがやって来た。

「ミケおいで〜」

は？おいでだと？

オレをなめてるのか？

来てくださいだろうが！

「ほらほら〜！猫缶あるよ〜」

くっ…猫缶でオレを釣るのか？

オレはそんなに安っぽい男じゃないわあ！！

……グ〜…

『……………』

「にゃ〜ん」

…悪いか？こちらら腹が減ってんだよ！

命がけなんだよ！

食欲には勝てんさ…んぐんぐ…

「おいし？」

「にゃ〜」

「そうかそうか。」

麻美ちゃんが笑顔でオレの食事を見ている。

オレはCMで言っている、『猫缶、猫まつしぐら。』の意味を理解した。

『プハー！うめえ！最高だぜ麻美ちゃん！そうだ！今日こそは外行こうぜ！』

オレは麻美ちゃんの足にしがみついた。

「どうしたの？まだお腹空いてるの？」

「にー！...」

「違うの？じゃあ、遊びたいの？」

「にゃん♪」

なんだよ...？悪いか？

いい返事だったろうが！

オレがなんて言おうがオレの勝手だろ！

「じゃあ外行く？」

「にゃん♪」

オレはやつと外に出ることができた。

さあて、何をしようかね？むしゃむしゃ…

「あ！何してるのミケ！？」

『あ？草食ってんだよ！悪いか？』

よく見るだろ？

飼い猫が外に出たら雑草くってんの。栄養あんぜ！今度食ってみな！

「さっき猫缶食べたばかりなのに…ミケは食いしんぼうだね」

「にゃー」

オレはそのまま1時間くらい雑草を食べ続けた。

第三話：麻美ちゃんと散歩2

ミケが雑草を食べ始めて約1時間が過ぎた。

「んな〜お」

むしゃむしゃ…お！アイツはポチじゃないか？

「ミケ？いつまで食べてんの？そろそろ帰るよ？」

何？！もう帰るのか！？

ポチが来たというのに！

『よお！ミケ！今日は麻美ちゃんとお散歩かい？いいなあ〜。俺も麻美ちゃんみたいない可愛い女の子と散歩してみてえよー！』

『うつせ！…あ！待って！麻美ちゃん待ってよ！』

オレが麻美ちゃんの方を見ると、麻美ちゃんが帰ろうとしている…
麻美ちゃんが帰ってしまったらオレは家に入れなくなってしまっ！
どうすれば……

『おりゃー！』

悩みに悩んだ結果…オレは麻美ちゃんに飛び付いた。

「きゃー！ちよつとミケ！あ…痛ッ！ちよつとー！」

『駄目だ…帰っちゃ駄目だ！もうちょっとオレと一緒に散歩しよう！』

オレは必死に麻美ちゃんにしがみつinaがら言った。

「わかった！わかったから！爪立てないで！」

「にゃー！にゃー」

やったぜ！お散歩続行だ！ひゃっほう！！
その後、麻美ちゃんは公園に向かった。

『麻美ちゃんって高校生になるんだよねー？いいなあ。俺も女子高生の飼い主がいいなあ。』

オレ達に着いてきていたポチが言った。

『ははは！そうだろうそうだろう！可愛くて優しい麻美ちゃんが羨ましいだろう？ははは！』

オレはポチに言った。

ははは！最高だぜ！

なんかオレってすげえ幸せもんかも。

「ミケーおいでー」

『あ！麻美ちゃん呼んでっからオレ、行くな！』

『へいへい。俺はここら辺で草食ってから帰りますよ。』

オレは走って麻美ちゃんのもとへ行った。

第四話：家に帰ろう

『風が吹いている』

オレが麻美ちゃんのところまで行くと、木と木の間から、けっっこう強い風が吹いてきた…

…ヤバイ！飛ぶ！

「にゃー！」

「ミケ？」

オレの異変に気付いた麻美ちゃんがオレを抱き上げる。

『助かった…アリガトよ！』

「雨降りそうだね…」

麻美ちゃんが空を見上げた。
マジかよ！？オレって雨猫？

「帰ろうか」

「にゃー！」

さすがにオレも雨で濡れるのは嫌だ。
今日のところは帰っかな

ガチャ

「ただいまー」

「あら！おかえりなさい。どこ行ってたの？」

「ちょっとミケと散歩ー」

家に帰ったオレ達を向かえたのはお母さんだった。

「ねーお母あーさん」

「ん？」

「昼ご飯なに？」

「焼きうどん」

「ふーん…今日は仕事終わるの早いね！」

「まあねー。」

「にゃー！」

「あらあら！ミケちゃんの分のご飯もちゃんとありますよー。」

お！オレの分もあるのか！？

やったぜ！今日は焼きうどんだ！

「はい。猫缶。」

「……………」

くっ…猫は家族の一員だぞ？

同じ扱いをしろ！

それに猫缶って……

いい加減、食い飽きたわああああ！！

「あら？知らないの？」

『おっと！待ちなんせえ奥さん。誰も食べないとは言っていないぜ！』

オレは猫缶に前足を伸ばした。

「はいどうぞ。」

カパッ

お母さんは猫缶を開け、オレ専用の器に中身を注ぐ。

『たまらねえぜこの臭い！』

オレはオレの器に注がれた猫缶に喰らい付いた。
んぐんぐ…んぐんぐ…

『ぶはー！うめえ！やっぱ家が一番だ！』

猫缶を食い付くしたオレは、居間にあるいつもの座布団に寝転がり、
明日に備えて寝ることにした。

さあて…明日は何をしようかねー？

第四話：家に帰ろう（後書き）

今まで読んでくださってありがとうございます！
なんか無理矢理終わらせた感じですが… 終了です。
次回作も読んでいただけたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4383a/>

ミケとゆかいな仲間たち

2010年10月9日04時21分発行